きらめく安寧の都市よ

2

武村正義　元八日市市長、元衆議院議員

ほろ苦い過去を歩んだ私のごとき人間に講演の機会をいただいて心の迷いもなくお受けしたうえ、たいした準備もしないで壇上に立っているわけであります。

先ほど林良嗣先生のお話を、私も耳をそばだてて聞いておりました。戦後の日本のまちづくりについての問題点をみごとに浮き彫りにしていただいたと思います。私自身の経験からお話ししようとしたことについても、おおかた触れていただいたような感じであります。

司馬先生の「琵琶湖はあと何年もちますか」

あれは30年あまり昔の話であります。いまは亡き司馬遼太郎先生と、琵琶湖畔で1回だけ対談させていただいたことがありました。ある新聞社に9回くらい連載されました。

琵琶湖畔のある小さな料理屋の眺めのよい畳の部屋で向かいあっていました。琵琶湖を眺めながら先生が冒頭におっしゃった言葉が、「武村さん、この琵琶湖はあと何年もちますか」というご質問でした。

琵琶湖も京阪神も「あと100年もちませんね」

琵琶湖があと何年もつか。当時は赤潮で右往左往しているときではありましたが、単刀直入なご質問を受けて、一瞬とまどっておりました。そうすると先生は、「500年はもちますか」と重ねておっしゃいました。私は即座に、「500年はもちませんね」と答えました。すると先生は、「そうでしょうね。私は100年だと思いますよ」と。琵琶湖はあと100年しかもたない、そういう先生の宣言でございました。

先生は続けて、「京阪神もあと100年もちませんね」とおっしゃいました。琵琶湖の水質の問題だけかと思っていたら、戦後われわれ日本人がつくってきた日本という国、日本のすべてのまちや地域、これはもうめちゃくちゃになると。「こんな調子では、この国は100年もたない」と単刀直入におっしゃいました。

あとからききましたら、「武村さん、私はこんな仕事をしているけど、もともと土木のことに興味があって、土木の書物だけは土木の学者に負けないくらい収集しているのです」。そんなこともおっしゃいました。

一人ひとりが私権を主張した結果

司馬先生は東大阪市にご自身のマイホームを新築されました。私も伺ったことがありますが、当時はほんとうにのどかな、広々とした田園風景そのものでありました。そこに自らの終の住処をおつくりになったのであります。

それから10年か20年という短期間に、あっというまに林良嗣先生のおっしゃったスプロールが進みました。大阪近郊ですから、田んぼや畑がどんどんと売られました。おもに住宅でしょうが、一部は工場、あるいはビルのようなものがゴチャゴチャになって進出してきている。

司馬先生もおっしゃっていましたが、整然とまとまったものならよいと思っていたけれど、ゴチャゴチャで、住宅にしたって三階建てもあるし、平屋建てもある。赤い屋根の家も黒い屋根もある。調和がぜんぜんとれていない。めいめいが好きに私権を主張しているわけであります。

都市計画法とか建築基準法などの法律で許されるなかで、みんなが好き勝手に建物をつくっている。こちらを向いているのもあればあちらを向いているのもあって、全体として見るときわめて混沌とした、カオスのようなまちがあっという間にできてしまった、先生はそう嘆いておられました。

司馬先生は、そういう大阪近郊の極端なスプロール現象と、赤潮が起こった琵琶湖の問題とを重ねて見ておられたのだと思います。こんなに好き勝手なことを日本人がこれからも続ければ、この国はまもなく滅ぶということをおっしゃったということであります。

まちづくりの原点となった西ドイツ

太平洋戦争が終わったのは、私が小学校5年生で満10歳のときでした。それから20年ほどして、私は初めてヨーロッパ、西ドイツに1年半ほど滞在しました。私は地方自治の仕事に携わる自治省に入ったものですから、主としてヨーロッパの地方自治のしくみ、もう一歩踏み込んでヨーロッパのまちづくり、地域づくりを勉強してこようということで行きました。

なんでこんなにまちが美しいのか

当時のヨーロッパ行きの飛行機はみなアンカレッジ経由でした。とにかく行った瞬間、ヨーロッパ大陸に到達して最初にハンブルクに飛行機が降りるとき、窓から見た初めてのヨーロッパのまちに、なんと美しいのかと……。なんでこんなにまちが美しいのかという驚き、信じられない思いで、初めてのヨーロッパの町並みを見つめておりました。

西ドイツにかぎりません、イギリスに行こうとフランスに

▶上空からのぞむ現在の東近江市八日市地区

行こうと大同小異でありました。同じように美しい町並みでした。考えてみると、ローマやギリシャの時代まで遡る都市計画の考え方があの地域には連綿とあって、そういう思想のもとにそれぞれのまちが存在しているわけであります。それにしても、理屈は別にして、一瞥しただけで美しい。もうその一点で私は唖然としてしまいました。

経済指標は、どっこいどっこいのはずなのに

言葉を換えれば、「昨日までいた日本の町並みはなぜ美しくないのか」という疑問であります。ドイツも日本も、ともに無茶な戦争をやってボロ負けした敗戦国でありました。当時は、それから20年ほどたったころでした。オリンピックは向こうのテレビで見ましたから、あのころであります。両国ともに壊滅的な惨状から再出発して、ほぼ復興したころでありました。すくなくともGDPとか経済成長率、貿易収支、そういう経済の指標でみるかぎりは、日本も西ドイツもどっこいどっこい。ともに急速に経済復興を遂げている国で、世界の模範的な国になりつつありました。

当時の日本は、オリンピックの開催だけでなく、新幹線ができた、高速道路が初めて開通した、そういう時期でありました。年間10％近い成長が続く時期でもありました。「経済の指標をみるかぎりは、西ドイツも日本もどっこい、どっこいだ。両方ともよくがんばっているな」という気持ちで西ドイツに行ったのですが、まちを概観するとまったく違う。まさに外国にきたという印象を強くもったのであります。

いまはたくさんの人が外国にでかけますし、テレビも毎日のように外国の風景を映しております。そんな外国の話をいまさらする必要もないわけでありますが、40数年昔の私の印象はそういうものでした。

日本人は自然を大事にしてきたか

少し落ち着いて西ドイツの町並みを眺めてみると、同じように経済は復興を遂げているのですが、なぜか、「日本は自然を大事にしない国だな」という印象でした。

日本人は自然を大事にしてきた民族だとさかんにいわれてきたし、私もそう思っていたのです。たしかに、自分の家の小さな庭とか家の中に盆栽を置くなどのレベルでの自然はけっこう大事にしている。本能的にそういう体質があります。しかし、パブリックなスペースとしてまちや地域を見たとき、はたしてどれだけ自然を大事にしているといえるのか。

当時も、山を削って海岸の埋め立てがどんどん進んでいました。トンネルは掘る、海岸は埋める、テトラポッドがあちらこちらで目だっている。そういう殺伐とした風景がありました。国土は拡がっているし、まちは機能的に拡張している。しかし、とにかく自然はどんどん壊されている。

しかし、多くの日本人はそのことにあまり矛盾を感じないで、「まちがよくなるのならいいじゃないか」、「道路が広くなるならいいじゃないか」、そういう気持ちでいた。そもそも、自然の捉え方が、ヨーロッパとはぜんぜん違うと感じました。

復元する西ドイツ、復興に価値をおく日本

もう一つ感じたのは、歴史に対する感じ方の違いです。まちの復興がみごとに進んでいるまちは、ハンブルクにかぎりません。デュッセルドルフにしろ、ミュンヘンにしろ、ニュルンベルクや地方の小さな都市にしても、日本以上に、90％以上が破壊されたまちが珍しくない西ドイツでした。しかも、そのほとんどを復元しているのです。戦災を受ける前のまちとほぼ同じ町並みを復元しているのです。

東日本大震災では、「復旧」と「復興」という言葉が政治の世界でもさかんに使われています。「復旧ではだめだ、復興だ」という言い方もあります。昔のままに戻すことが復旧だとすると、それだけではだめだと。「阪神・淡路大震災で神戸は復旧だけにとどまった」という批判めいた話もちょいちょい耳にします。その意味では、戦前のまちをそっくりそのまま「復旧」したのが西ドイツでした。

西ドイツは変えないのです。一つひとつの建物どころか、レンガの一つひとつも変えない。新しいレンガを使うにしても、戦前と同じような古さを感じさせるレンガを積む。街路の石にしてもなんにしても、昔と同じ石を探して並べる。そうして復元した西ドイツのまちは、どこに行っても20数年前の戦争前と変わらない。すくなくとも、まちの中心部には教会があって、広場があって、市場があって、市役所がある。そういう中心の部分は昔のまま きっちり復元するのが当たりまえでありました。

歴史にドライな日本人のまちづくり

そのころの日本はどうだったのか。私は、日本人というのは歴史にすさまじくドライな民族だな、としみじみ思いました。温故知新という言葉がありますが、温故という気持ちのあまりない国民だなと。日本の何千というまちに、昔のまち

▶東近江市の自転車専用道路

に復元しようという動きはどこにもありませんでした。

そうかといって、まったく新しい大胆で近代的なまちづくりもあまりありません。名古屋市内の大きな道路なんかは珍しいくらいです。あれは大胆な戦後の都市計画の一つの例ですが、ほかにはあまり例がありません。多くは前のままで、それぞれが好き勝手に自分の土地に自分の好きな建物を建てる。少しお金ができたら、それを鉄骨や鉄筋にする。そうして日本のまちは戦後20年たって復興しました。したがって、昔の面影はまったくない。城下町であればお堀や天守閣などはそのまま残して、私的な所有に任されている部分はめいめいが好き勝手に復興している。

個性を失った日本の都市とまち

自然と歴史という二つのポイントだけを捉えても、西ドイツと日本とではなぜこんなに違うのかとずっと考えながら、西ドイツで1年半ほどぶらぶらしておりました。

あれからもう40何年たっておりますが、その問題意識はいまでも変わりません。きょうの林先生の話を聞いて、もう一度過去を思いだし、目が覚めたような気持ちになりました。

自然と歴史の特性を壊してしまった、忘れてしまった日本人。結果として、個性をもたないまちをつくってしまった日本人。いってみれば、いまや北海道から沖縄までどの地方に行っても、電車で居眠りしてどこかに着いても、駅前の風景にあまり違いはありません。駅名の看板を見て、「ここが函館か」、「ここは小樽か」と思うだけであって、駅前風景に個性はほとんどありません。中心の商店街も、西も東もほとんど特徴がありません。

八日市市での私のまちづくり

そのようなまちをつくって60数年、われわれは戦後の日本に存在していますが、どこが問題かをあらためてえらそうに言える立場ではありません。提起するだけであります。

「森」、「水」、「屋根」できらめくまちを

私自身は市長の仕事を少しやらせていただき、県政も少し担当しました。滋賀県八日市市では、そういうヨーロッパで経験した感覚のようなものが頭にあって、市長になっていきなり「森と水と屋根のあるまちをつくります」という公約を掲げました。「森と水と屋根のあるまち」などと突然に言っても、なんのことかわからないですね。

まずその「森」ですが、八日市市には『日本書紀』に記載されているような大きな森がありました。そこで、この森は手をつけないですっぽり残すまちづくりを計画しました。

市内には愛知川（えちがわ）の清流が流れていて、その清流を農業用水として市内のあちこちに引いていました。そこで、この農業用水を新しくつくった行政区画のまちづくりに利用する。農業のための水をまちの空間に引っ張り込むことにしました。京都の高瀬川は、かつては運搬に使ったようですが、いまや眺めるだけでも風情がありますね。ああいうかたちで、まちのまん中に清流を流そうと、わざわざ水を引っ張ってきました。

「屋根のあるまち」というのは、新しいその行政区画に官公庁の施設をつくったのですが、そこに建つ市役所、警察、保健所などすべての建物に屋根をつけました。公共の建物のすべてに屋根をつけさせました。屋根をつけない施設はこの土地には入れさせない。市長としてそういう決断をしました。

30年後に残る「まちの個性」の演出

大きな森をすっぽり残し、清流を招き入れ、建物にはたとえ3階、4階建てであろうとすべてに屋根をつける。そういう試みをしました。30数年昔の話です。

そんな話は、いまではごく平凡な話に映るかもしれません。しかし当時は、「市長はなにを言っているのだ」と市民はなかなか理解してくれませんでした。屋根は、まちの一つの特色をつくろうと提案したものですが、八日市市と屋根とに特別の関係はありません。しかし、戦後のほとんどの近代建築は、学校であろうがなんであろうが、ミカン箱のように上は扁平で屋根のない建物が当たりまえでした。ですから、屋根をつけることでユニークさを見いだそうとしたのです。

八日市市は、町村合併でいまは東近江市になっています。あちらの方面をドライブされることがあれば、ぜひご覧ください。私の30数年前の夢の跡を見てください。

「小さくても個性のあるまちづくり」をスローガンに

もう一つやろうとしたのが自転車都市宣言。都市宣言まではやりました。自動車の便利さに異議を差し挟むわけではありません。自動車道路も否定はしませんが、田舎の小さなまちに、徹底して自転車専用道路をつくろう、網の目のようにつくろうとしました。

八日市市のおおかたは田園地帯ですから、田んぼの農道を専用道路にすればよいわけです。そんなにお金がかからないということもあって、まず議会で自転車都市宣言をして、5、6本の専用道路をつくらせていただきました。ほんとうは100本くらいつくりたかったのですが、5、6本できたところで市長を辞めましたから、中途半端で終わっています。

▶旧八日市市役所は、現在東近江市役所となっている

※写真はすべて東近江市提供

これも人口4万くらいの小さな都市の一つのありようとして、ひとつの個性づくりとして提案し、取り組んだサンプルの一つでありました。

「小さくても個性のあるまちづくり」が、当時の市長としての私のスローガンでした。林良嗣先生のスマート・シュリンク（小さくなる、縮小する）という言葉におもねるわけではありませんが、このスマート・シュリンクという言葉は、ヨーロッパの学者がつくったのかと思って林先生に尋ねたら、「違う、私が考えた」とおっしゃって驚きました。日本はいよいよ人口減少の時代に入りましたから、ある意味でこれは迫力のある、意味のあるご提案だと思っております。

小さくともキラリと光る国、日本を

かつての私は、そのように「小さくても個性のあるまち」という言い方で地方自治に携わっておりました。その後、国会議員になって、『小さくともキラリと光る国・日本』（光文社、1994年）という本をだしました。日本は、二度と大国を目ざさなくてもよいという意味で、「小さくとも」と表現したのです。日本は東洋の島国ですから、これ以上国土をエクスパンドする必要はないという意味で「小さくとも」とし、問題は中身や質だという意味で「キラリと光る国」という表現にさせていただきました。

「すみずみキラキラ日本列島」

滋賀県知事を辞めて、私は国会にでました。当時は自民党の派閥全盛時代で、私は安倍晋太郎さんの派閥に所属しました。安倍晋三さんのお父さんです。

その安倍さんからいきなり、「武村さん、講演するからおもしろい原稿をつくってくれ。なにかユニークな発言を少し考えてくれ」と言われました。即座に私は、「すみずみキラキラ日本列島というのはどうですか」と少し冗談めかして申しあげました。

国づくりについての本は、田中角栄さんの『日本列島改造論』（日刊工業新聞社、1972年）がありましたが、安倍さんの雰囲気にあっていませんでした。ところが、安倍さんはこれが気に入って、翌日の講演で、「すみずみキラキラ日本列島を目ざしたい」と発言されたことがありました。

このときの私にはやはり、北海道から九州までどの駅前も同じ風景だということへの反発がありました。風景だけでなく、駅前の食堂にしても、カレーライスやハヤシライスなどよく似たメニューばかりが同じような値段で並んでいる。味にもどうという特徴はありません。ようするに個性がない、ローカル・カラーがないということを言いたいのです。

そのような日本――きわめて画一化し、単調化した、多彩さのない、バラエティのない日本列島をつくってしまった。このことへの反省に立って、もう一度、稚内から九州の小さなまちにいたるまで、すみずみ日本列島の大小のまちが、それなりの個性をもって、それなりにキラキラ光り輝くような日本につくり替えようではないか。そういう意味をこめて、そのような表現を提案させていただきました。

きらめく日本の再出発

戦後67年になりますが、日本の国土計画やまちづくりにあまり大きな前進はありません。そんななかで東日本大震災が起こり、原発事故が起こりました。こういうときだからこそ、あえて「きらめく安寧の都市を」という少しハデな表現の演題にしました。これは先ほど申しあげた「すみずみキラキラ」という表現と重ねあわせているのであります。この大震災を原点にして、日本の国を100年かけてもう一度つくり直そうではないか、そういう私の提案であります。

この日本列島の100年構想も、100年というタームをかければ、かなり大胆なことができます。いまある鉄筋の建物も、100年存続するものはまずありません。その鉄筋の建物のある場所に、いまから大きな公園や道路をつくるプランをつくったっていいじゃないか。その建物が老朽化すれば立ち退いてもらう。あるいは、市が買い取るなりして移ってもらう。そのくらいの大胆な発想で、それぞれのまちが100年構想をつくりなおそうではないか。

それぞれのまちは、自然の魅力、歴史の個性、そういうものを本来もっています。それを削り取るのではなく、しっかりと際だつように活かそうではないか。そういう気持ちで新しい日本の国づくりを再出発してはどうかと思っております。

なにか入り口だけの話をしたような感じではありますが、時間がきましたので、これで終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

第2回　安寧の都市ユニット　シンポジウム
2011年7月23日　京都大学百周年記念ホールにて

たけむら・まさよし◉自治官僚、政治家。現在は龍谷大学客員教授、徳島文理大学大学院教授。八日市市市長、滋賀県知事（3期）、衆議院議員（4期）、新党さきがけ代表、内閣官房長官、大蔵大臣を歴任。著書に、『小さくともキラリと光る国・日本』（光文社、1994年）、『聞き書　武村正義回顧録』（岩波書店、2011年）などがある。